

## 小城鍋島文庫蔵書解題稿(四)

中尾友香梨・白石良夫・大久保順子・土屋育子  
沼尻利通・中尾健一郎・村上義明

### An Annotated Bibliography of Books in the Ogi Nabeshima Collection (Part 4)

Yukari NAKAO, Yoshio SHIRAIISHI, Junko OHKUBO, Ikuko TSUCHIYA,  
Toshinichi NUMAJIRI, Kenichiro NAKAO, Yoshiaki MURAKAMI

小城鍋島文庫研究会 (<https://sagakoten.jindo.com/>) では、二〇一五年度以来、当文庫蔵書の悉皆調査を実施している。目指すところは、全蔵書の書誌解題の作成にある。その途中報告として、まず白石良夫が小城鍋島文庫蔵書解題稿(一)を『佐賀大國文』第四十四号(二〇一六年三月)に発表し、ついで中尾友香梨・中尾健一郎が同(二)を本紀要第五号(二〇一七年三月)に発表した。さらに二〇一七年五月、二篇をまとめ、ほかの会員も寄稿して『小城鍋島文庫蔵書解題集(試行版)』を出した。本稿はそれを継ぐものであり、今後このような形で解題稿を蓄積してゆく。

解題執筆においては、それがかつて小城鍋島藩の蔵書の一冊であったという歴史的事実を、つねに強く意識する。たとえそれが片々たる雑本であっても、一冊の薄汚れた端本はたんぼであっても、である。このような視点に立った書誌解題を集積し、専門家の読むに堪える、小城鍋島文庫の歴史と現在を語る、そんな読み物を実現することを目指す。

そして、小城鍋島文庫の個々の資料を、そこに在るモノとして記述し、モノに語らせる。すなわち当文庫蔵書の書誌事項を優先することに努め、内容や史的な位置づけなど一般的解説については必要最小限に抑えた。ただし、当文庫にしか伝存しない資料については、詳しい内容に立ち入った。

本研究は、科学研究費基盤研究(C)「小城鍋島文庫蔵典籍の解題目録と蔵書印データベースの作成」(研究代表者中尾友香梨、課題番号18K00282)の助成を受けたものである。

【キーワード】 小城鍋島文庫、藩蔵書、解題

智慧の環 (ちえのわ) 80-19 刊 古川正雄著

半紙本、初編二冊(上下)・第三編一冊(上のみ)・第四編二冊(上下)。原題簽「(絵入)智慧の環」。見返し(初編)、

明治三年

〈絵入〉智慧の環 〈初編上詞之巻〉

古川正雄著

同(第三編)、

明治四年辛未六月

〈絵入〉智慧の環 〈三編上大日本国尽の巻〉

古川正雄著

同(第四編)、

明治五年壬申初夏

〈絵入〉智慧の環 〈四編上名所の巻〉

古川正雄著

初編奥付、

内田楓山書

八田小雲画

明治三年庚午八月

官許 古川氏蔵板

売弘所 岡田屋嘉七

四編奥付、

明治五年壬申五月刊行

古川氏蔵板

売弘所 岡田屋嘉七

全冊、版心に「智環」とあり。蔵書印「又新舎」。

初等教育の教科書・教材書。著者古川正雄(一八三七〜一八七七)は福沢諭吉門の教育者。明治五年の学制発布後、文部省の教科書に採用される。  
(白石良夫)

智慧の環 (ちえのわ) 80-20 刊 古川正雄著

半紙本、第二編二冊(上下)・第三編二冊(上下)・第四編一冊(上のみ)。原題簽「(絵入)智慧の環」。見返し(第二編)、

明治三年

〈絵入〉智慧の環 〈二編上万区に尽の巻〉

古川正雄著

同(第三編・第四編)、前項書に同じ。蔵書印「又新舎」。

(白石良夫)

智慧の環 (ちえのわ) 80-21 刊 古川正雄著

半紙本、第二編二冊(上下)・第三編一冊(上のみ)。原題簽「(絵入)智慧の環」。見返し、前掲書に同じ。蔵書印「小城藩」。  
(白石良夫)

(白石良夫)

智慧の環 (ちえのわ) 80-21 刊 古川正雄著

半紙本、第四編一冊(下のみ)。原題簽「(絵入)智慧の環」。蔵書印「又新舎」。  
(白石良夫)

通語 (つご) 0212-5 刊 中井履軒著

大本、十卷三冊(第一冊卷一～四、第二冊卷五～七、第三冊卷八～十。一部紛失)。木活字本。全題簽剥落、打付け書き「通語」。内題・序題・版心題「通語」。見返し、

水哉館遺編

〈官許〉通語

懷徳堂藏

「水哉館」は中井履軒の別号。一の序文末「天保辛卯春 早野正己(号流水)序」、文中「野史氏以幽人自居」。清水中洲の序もあるが、後半を欠く。その序文冒頭に「通語十卷係吾天楽翁早年之作、実在于明和初年矣」とある。「幽人」「天楽翁」ともに履軒の別号。

左の奥付あり。

明治九年五月十一日版權免許

著者相続人 中井修二 (住所、略)

出板人 浅井吉兵衛 (住所、略)

全 水野善九郎 (住所、略)

蔵書印「長崎県小城中学校印」。

保元の乱から南北朝合一までの歴史を論じる(漢文)。中井履軒(一七三二～一八一七)は大坂の朱子学者。名積徳。兄竹山の跡を継いで懷徳堂の学頭となる。(白石良夫)

通語 (つご) 0212-6 刊 中井履軒著

大本、六卷二冊(第一冊欠)。原題簽「通語」。前掲書と同版(奥付も同版)。不審紙あり。各冊末に識語「石動蔵書」。(白石良夫)

山陵志 (さんりょうし) 0213-28 刊 蒲生秀実著

大本、二卷一冊。原題簽「山陵志」、内題・版心題も同じ。各卷末、

関東後学 蒲生秀実稿

成立年や出版年を明示する情報がない。漢文。蔵書印「荻覺蔵書」。

歴代天皇の陵墓を、文献と实地踏査によって考証した研究書。

学術的に優れているのみならず、幕末の尊王思想に大きな影響を及ぼした。内題部分の割書きに「九志二之二(二)」とある。秀実が「九志」の著作を計画し、その二番目という意味。が、完成したのはこの『山陵志』と『職官志』(九志之四)のみ。著者蒲生秀実(一七六八～一八一三)は字を君平という。勤皇家として著名。(白石良夫)

藤樹先生年譜 (とうじゅせんせいねんぷ) 0214-17 刊

川田甕江著

半紙本、一冊。原題簽「藤樹先生年譜」、内題・序題「藤樹先生年譜」。内題下「黄微 川田剛毅卿撰」。見返しに、

黄微川田剛毅卿著

藤樹先生年譜

大溝修身堂藏梓

とある。修身堂は大溝藩藩校。序文末、

安政五年歳在戊午春正月

標嶺分部光貞撰

分部光貞（標嶺は号）は大溝藩最後の藩主。

中江藤樹の伝記研究。藤樹出生から没年までの、日付単位の詳細な年譜考証である（漢文）。著者川田堯江は備中松山藩儒、維新後東京大学教授。その後書きに、藤樹の事蹟に異同あることを危惧した大溝藩藩主に依頼されて執筆した旨を記す（年記「安政丁巳冬十一月」。「徳本堂記」を付す。〔白石良夫〕

都名所図会（みやいめいしよずえ） 0221-1 刊

秋里籬島著 竹原春朝齋画

大本、六卷六冊。原題簽「都名所図会」。題簽には外題のほか「平安城」（一・二冊目）、「左青龍」（三冊目）、「右白虎」（四冊目）、「前朱雀」（五冊目）、「後玄武」（六冊目）とあり。また全冊に「再刻」とあり。目録題「都名所図会」。序文末には「安永九<sup>庚</sup>子年仲秋／五条式部大輔菅原為俊卿／栖霞館主人書」、跋文末には「季十三夜於<sup>テ</sup>斑竹邸<sup>ニ</sup>書<sup>ス</sup> 岬安永九年也／選者 平安 秋里湘夕」とあり。奥付、

画工<sup>漢</sup> 春朝齋竹原信繁

彫工 京師 永島六右衛門

山本長左衛門

伊沢又治郎

同 浪花 藤江喜平治

藤木金兵衛

坂本新 輔

山本清右衛門

安永九年子中秋新板

天明六年午初春再板

皇都書林 寺町通五条上<sup>ル</sup>町

吉野屋為八梓

一部の挿絵に、旧蔵者によるものと目される手彩色が施されている。蔵書印「荻府蔵書」。

読本作者としても知られる秋里籬島は、画家の竹原春朝齋や、書肆の吉野屋為八とともに、『都名所図会』を刊行した。本書は江戸時代後期の名所図会流行の端緒となり、以後、数々の名所図会が上梓された。〔村上義明〕

拾遺都名所図会（しゅういみやこめいしよずえ） 0221-2 刊

秋里籬島著 竹原春朝齋画

大本、四卷五冊。第一〜三・五冊、原題簽「拾遺 都名所図会」。第四冊、後補題簽。題簽には外題のほかに「平安城」（第一冊）、「左青龍」（第二・三冊）、「後玄武／右白虎」（第四冊）、「前朱雀」（第五冊）とあり。目録題「拾遺 都名所図会」。序文末には「天明丁未九月／鷺尾大納言藤原隆建卿／桜室主人」とあり。跋文は

二つあり、一つには「天明六丙午歳七月採筆於永昌堂／平安秋里（飛福）湘夕題」、もう一つには「天明七年六月望日／浪速人春朝斎竹原信繁しるす」とあり。尾題「補遺都名所図会平安城之巻」（第一冊）、「補遺都名所図会青龍巻」（第三冊）、「都名所図会拾遺」（第四冊）。奥付、

画工浪花 春朝斎竹原信繁

江都書林 本石町十軒店

山崎金兵衛

日本橋南三丁目

前川六左衛門

天明七年未秋新板

皇都書林

寺町通五条上ル町

吉野屋為八梓

蔵書印「荻府蔵書」。

『都名所図会』の続編として、前編に掲載されなかつた京都の名勝旧跡について図入りで解説したもの。（村上義明）

都林泉名勝図会

（みやこりんせんめいししょうざえ）

0221-3 刊

秋里籬島著 佐久間草偃・西村中和・奥文鳴画

大本、五卷六冊。原題簽「都林泉名勝図会 一（〜五）」。巻一のみ「乾」「坤」に分冊（外題による）。目録題「都林泉名勝図会」（第一、三〜五冊）。序文末に「寛政とをあまりひと、せの春／藤波二位季忠卿／水竹居主人書」、跋文末に「寛政十一載仲夏／

平安 秋里籬島（湘夕）とあり。尾題「都林泉名勝図会」（第二〜五冊）。第一冊（巻一）凡例の匡郭外に「従是奥彫工 井上治兵衛」、第四冊（巻三）目録の匡郭外に「彫工 樋口源兵衛」、第五冊（巻四）目録の匡郭外に「此一冊彫工 井上治兵衛」とあり。奥付、

画工 法橋佐久間草偃

法橋西村中和

奥文鳴源貞章

京都 吉野屋為八

京都 須原屋善五郎

浪速 河内屋喜兵衛

河内屋太助

寛政十一己未 歳仲夏発行

皇都書廊 六角通御幸町西江入町

小川多左衛門梓

蔵書印「荻府蔵書」。

北村援琴著・藤井重好画『築山庭造伝』（三巻三冊）を参考に、京都とその周辺の著名な庭園について絵入りで解説したもの。また諸寺・方丈・書院に蔵される名画・名筆・什宝・虫干しの様相についても記される。（村上義明）

京城勝覧（けいじょうしょうらん）

0221-4 刊

貝原益軒著

中本、二巻一冊。打付け書き「京城勝覧」。内題「京城勝覧」。宝永三年・損軒貝原篤信（貝原益軒）序。

見返し、

篤信先生著

京城勝覽

洛陽 書林 柳枝軒

奥付、

六角通御幸町西へ入町

書林茨城多左衛門開板

京都の名所を全十七日の行程に分けて見物できるように書かれた案内書。巻末に拾遺を付す。上欄に絵を配す。  
(村上義明)

淀川兩岸一覽 (よどがわりようがにいちらん) 0221-6 刊

暁晴翁(鐘成)著 松川半山画

奥付、  
中本、一冊(下巻存)。多色刷。原題簽「淀川兩岸一覽 下り船之部 下」。

浪華

暁前編成晴翁著述

同 松川半山画

皇都 鎌田醉翁備筆

(略)

文久元年辛酉年季春発行

書肆 江戸日本橋通式丁目

山城屋佐兵衛

京都麴屋町姉小路

俵屋清兵衛

大坂心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

『淀川兩岸一覽』は京都より大坂に至る淀川流域を描いた全四巻四冊の地誌である。上り船之部(二冊)と下り船之部(二冊)に分かれる。小城鍋島文庫本は第四冊のみ存。  
(村上義明)

淀川絵図 (よどがわえず) 0221-7 写

折本、一帖。手彩色。後補題簽「淀川絵図」。

現在の京都市伏見区辺から大阪までの淀川流域を肉筆で描いたもの。地名のほか、城・陣屋・駅・小休所・渡し・寺院・茶船在所が記号で表示されている。紙面には長門介景樹(香川景樹)らの詩歌が配されている。  
(村上義明)

中山伝信録 (ちゅうざんでんしんろく) 0222-22 刊 徐葆光著

大本、六巻六冊。漢籍(和刻本)。原題簽「中山伝信録」、内題・版心題・見返し題いずれも「中山伝信録」。見返しに「康熙庚子七月十一日熱河進呈冊封琉球図本副墨」「康熙六十年辛丑刊/二友齋藏板」とあり。康熙庚子は一七二〇年。

巻頭に「重刻中山伝信録序」と題する新しい序文を付す。その末尾「大日本明和三年冬十月/平安服天游伯和父撰」。「服天游」は服部蘇門(一七二四~一七六九)、「伯和」はその字。書肆より校訂を嘱されたが、病を理由に門人永田観鷲(一七三八~一七九

二)にその任を委ねた旨の記事がある。奥付に、

明和丙戌五月

平安蘭園蔵板

平安書林

文錦堂 林伊兵衛発行

とある。明和丙戌は一七六六年。挿絵あり。

該書は後掲書の書肆名のみを彫り替えた後刷本。著者徐葆光は清朝の官僚、琉球国王の冊封副使として琉球に渡る。滞在中の見聞や調査結果の皇帝への報告書。琉球研究の一級史料。

(白石良夫)

中山伝信録 (ちゅうざん でんしんろく) OCS-69

大本、一巻一冊(巻六のみ存)。題簽剥落。奥付、

明和丙戌五月

平安蘭園蔵板

平安書林西山房

錢屋善兵衛発行

前掲書と同版。奥付傍線部のみを彫り替えたのが前掲の本。蔵書印「叢桂館蔵書」。(白石良夫)

本朝女鑑 (ほんちょうじょかん) OCS-90 刊

大本、十二卷十二冊。原表紙、外題、第一冊「本朝女鑑 一

賢明上」、第二冊「本朝女鑑 二」(打付け書き)、第三冊「本朝

女鑑 Ⅲ 仁智上」、第四冊「本朝女鑑 四 仁智下」、第五冊「本

朝女鑑 五 節義上」、第六冊「本朝女鑑 六 節義下」、第七冊

「本朝女鑑 七 貞行上」、第八冊「本朝女鑑 八 貞行下」、第

九冊「本朝女鑑 九」(打付け書き)、第十冊「本朝女鑑 十 弁

通下」、第十一冊「本朝女鑑 十一 女式上」(後補題簽紙に墨書)、

第十二冊「本朝女鑑 十二 女式下」(一・三・四・五・六・七・

八・十・十二冊は刷題簽)。序文あり、跋文なし。各冊各巻に目

録、挿絵あり。跋なし。奥付、

寛文元年辛丑九月吉旦

榎木町 吉田四郎右衛門板刊

とあり、同年月刊の西村又左衛門版の後刷本である。蔵書印「曲肘亭」(叢桂館蔵)。

仮名草子。古代から近世までの日本の名女の伝説を集めたもので「女式」に和漢の女性教訓を収める。本文内の著者情報はない。寛文十年増補書籍目録「十二冊、本朝女鑑、松意作多入」の記述等より、浅井了意の作と推測されている。(大久保順子)

天狗芸術論 (てんぐげいじゆつろん) OCS-117 刊 佚齋樗山作

半紙本、四卷四冊。全冊題簽剥落(打付け書き「天狗芸術」)。

内題・尾題・序題「天狗芸術論」、版心題・跋題「芸術論」。巻一

内題下に「佚齋樗山述」とあるも、埋木であること歴然。樗山は

本名丹羽十郎右衛門忠明、下総国関宿藩藩士。

挿絵あり。序文年記・署名、

享保十三歳次戊申臘月良辰

東武江城豊島郡隠士 神田白龍子叙

奥付、

享保十四歳次己酉孟春

書肆 洛陽 堀河錦上ル町 西村市郎右衛門

武陽 本町三丁目 西村源六藏版

その横に「豊島町 彫工栗原次郎兵衛」とある。最終巻末に西村源六の蔵版目録を付す。

該書第一冊末に左の戯れ書きあり(同じ歌二首)。貸本屋の筆か。

此本を貸すにおしくはなけれどもかへさぬ人の面のにくさや天狗が武芸論を戦わせるのを、若い剣術者が盗み聞きするとう趣向で、わかりやすく滑稽な語り口で儒仏の教えを説く。談義本の初期作品のひとつ。(白石良夫)

蘭学階梯(らんがくかいてい) 082-9 写

大本、二卷一冊。共紙表紙、仮綴じ。外題(打付け書き)「蘭学階梯」、内題・目録題・序題・跋題・尾題いずれも「蘭学階梯」。内題下に、

東奥玄沢大槻茂質撰

とある。序文二篇、その一の末「序天明癸卯之冬 龍橋源昌綱撰 / 懶齋子阮繁書於香芸書屋」、あと一の文末「天明癸卯之冬出雲侯入江都孔平信敏識」。例言あり、その末尾「天明三年癸卯季秋

初吉 東奥玄沢大槻茂質子煥父識」。跋文末に、

天明癸卯之冬 津山侍医宇晋撰

西肥荻清行書 「豊福」(印)

とある。該書は版本の写しである。版本跋文末の一行は「東江源鱗(沢田東江)書」とあるが、右のごとく書き換えたのは書写者の戯れ。アルファベットによる書入れあり。

最初の蘭学入門書。卷上は蘭学伝来の概説、卷下はオランダ語の文法などを記述する。(白石良夫)

三語便覧(さんごべんらん) 082-12 刊

大本、三卷三冊。原題簽「三語便覧」、内題・目録題・序題・凡例題・尾題・版心題、いずれも「三語便覧」。内題下に「松代茂亭村上義茂著」、見返しにも「茂亭村上義茂著」とあり。見返し、

茂亭村上義茂著

三語便覧

達理堂藏

奥付なし。序文二篇、一はその文末に、

嘉永七年甲寅良月

宕陰塩谷世弘題

沢俊卿書

もう一には、

嘉永甲寅孟冬畏堂小林至静識



沢俊卿書

とある。凡例末にも「茂亭識」とある。

本書はフランス語・英語・ドイツ語の三語と日本語との対照辞書。著者村上義茂（一八一〜一八九〇）は名を英俊ともいう。

茂亭は号。蘭学をまんで松代藩医となる。同藩の佐久間象山からフランス語を勧められ、独学で学んだ。わが国フランス学の草分け的存在。  
（白石良夫）

伊勢物語図会（いせものがたりずえ） 91-04 刊

大本、三冊。原題簽「校訂伊勢物語圖會」。内題「伊勢物語」。蔵書印なし。絵入本。序文は次のとおり。

伊勢物語序

初冠の若うどたちはいふもさらなりふり分髪ワケガミのわらはべらも難波津浅ナニハツアサか山のいとまゝにめなれくちなれていとよきみやび書はこの物語になむ有けるされど世におこなはるゝあまたの素本スリマキはいづれもくゞ仮字カナの違タガひ文字モジのあやまりなどいとしげきをこたび或人かのわらはべらが為タメにとてかくあらため訂ツしてくだりくゞに画エをも物して摺卷ズリマキにはなしつるなりこをはたおのれに猶よく校カム分合ヘアセて序をもくはへてよとこふに付て真名本マナフマキなどに引くらべてことなる處トコロ々のよしやあしやのいさ、かなるを頭書に物しつさてかの今を春べと咲サキにほふ言葉の花の光る源氏の物語ぶみをはじめ新古今シンキョウキン和哥集ワカミツの作者サカキなどもはらこの物語によりて思オモひえられしオホも多オホかれば

是コレぞみやび詞のおやとももちいつくべくいみしくめでたき書ツキのなにおふいせの海の清きなぎさのま白玉になむ有けるさるをなま心あるわかうどたち影カゲさへ見ゆる山の井に思ひなみ過したまひそ

このくだりくゞに物したるゑは名にたかき難波人法橋玉山が筆なりかくいふは文政六年の春尾張名兎屋人 市岡猛彦

市岡猛彦は本居門下の国学者。絵を書いた「法橋玉山」は岡田玉山で、浮世絵師。奥付は、

文政八年乙酉秋

書林 江戸 鶴屋金助

同 大坂屋茂吉

大阪 河内屋曾七

京 吉野屋仁兵衛

名古屋 永樂屋東四郎

同 美濃屋伊六

とある。上巻は初段から四九段まで、中巻は五十段から七八段、下巻は七九段から百二五段。ただし、下巻は七八段末尾の「とんよめりける」から始まる。  
（沼尻利通）

〔参考〕関口一美「整版本伊勢物語」(山本登朗編『伊勢物語版本集成』竹林舎、二〇一一年)。

大鏡（おおかがみ） 92-01 刊

大本、八卷八冊。外題「大鏡」。題簽は各冊とも中央よりやや

左側に貼られているが、巻一・五・六・七は「大鏡」の題簽の左傍らに、さらに「大か、み」（巻一）「おほか、み」（巻五・六・七）の題簽も併せて貼られる。すなわち、巻一・五・六・七は二つの題簽が貼られていることになる。巻一・六の題簽には菱に八つ花の文様、巻五・七の題簽は無地。内題「大鏡」。各冊の冒頭に目録を載せる。奥付なし。蔵書印「曲肘亭」。

『大鏡』の諸本は、古本系統・異本系統・流布本系統の三つに分類できる。整版本は流布本系統に属する。（沼尻利通）

〔参考〕秋葉安太郎「大鏡本文の研究」『大鏡の研究』上巻本文篇 桜楓社 一九六一年。山岸徳平「大鏡研究」『歴史戦記物語語研究』山岸徳平著作集第四巻 有精堂出版 一九七三年。

### 大鏡（おおかがみ） 092-11 刊

大本、八卷八冊。外題「大鏡」。蔵書印なし。前掲書（092-01）と同版。刷の状態から、該本は後刷り。一部に乱丁あり。（沼尻利通）

### 保元物語・平治物語（ほうげんものがたり・へいじものがたり）

大本。六卷六冊。うち、それぞれ三卷三冊で『保元物語』『平治物語』にわかれる。六冊とも表紙色同じ。 092-03 刊

『保元物語』は、原題簽「新板保元物語」。内題「保元合戦記」。版心題「保元」。目録題「保元物語」。尾題「保元物語」。『平治物

語』は、原題簽「新板平治物語」。内題「平治物語」。版心題「平治」。目録題「平治物語」。尾題「平治物語」。奥付に「于時寛永三丙刀年長月吉辰」とある。蔵書印なし。

『保元物語』整版本は寛永元年片仮名交じり版、寛永三年平仮名交じり絵入り版、明暦三年平仮名交じり絵入り版、貞享二年平仮名交じり絵入り版、元禄十五年平仮名交じり絵入り版、の五種あり、該本は、このうちの寛永三年平仮名交じり絵入り版に分類できる。（沼尻利通）

〔参考〕原水民樹「流布本系統の諸本」『保元物語』系統・伝本考』和泉書院 二〇一六年。

### 三国物語（みくにものがたり） 093-09 刊

大本、一卷二冊（巻五のみ存）。原表紙、刷題簽「参入 三国物語」。目録題・尾題「三国物語」、版心題「三国」。著者情報なし。挿絵あり。第二冊末尾に刊記「寛文七丁未初夏吉日 吉野屋惣兵衛開板」。蔵書印「曲肘亭」「叢桂館蔵」。

本書には五卷五冊本のほか、五卷七冊本・三冊本等の形態あり。題簽と内題の位置からみて、該本（巻五、二冊）の装丁は、旧三井文庫蔵五卷七冊本の巻五（第六冊・第七冊）の分冊と同じ形であり、寛文年間書籍目録等の記載にみられる七冊本の系統の体裁を残すものである可能性がある。

仮名草子。和漢の軍記や説話集等を典拠に、我朝・唐・天然の三国の、孝行・発心・勸戒等の啓蒙教訓的な故事説話を集める。

後に『天竺物語』『大唐物語』『我朝物語』の改題抜粹本が作られている。

(大久保順子)

〔参考〕『仮名草子集成』第三十一卷（東京堂出版、平成十四年）、大久保順子「『三国物語』の二本に関して——小城鍋島文庫本と広島大学蔵本——」（『仮名草子集成』第三十二卷、東京堂出版、平成十四年）

### 今四家絶句（こんしかぜっく） 097-17 刊

北原秦里・宮沢雲山・梁川星巖編

半紙本、二巻二冊。原表紙、上巻後補題簽「今四家絶句 上」、下巻原題簽「今四家絶句 下」。内題「寛齋先生百絶」（如亭先生百絶）「詩仏先生百絶」「五山先生百絶」。版心題「今四家絶句 寛齋」（同）如亭」（同）詩仏」（同）五山」。見返し、

寛齋先生／如亭先生

今四家絶句

詩仏先生／五山先生 江戸書肆 文刻堂／玉山堂 合刻

目録なし。文化十二年（一八一五）秋の亀田鵬齋序と葛西因是序を冠するも、いずれも題と印記はなし。各内題の下に、

秦里居士／細庵外史／詩禪道人 同輯

とあり、跋文はなし。奥付、

文化十二年乙亥九月

書林 京堀川通仏光寺下ル

植村藤右衛門

大坂心齋橋南久宝寺町

泉本八兵衛

江戸石町四丁目

西村源六

江戸日本橋通二丁目

山城屋佐兵衛

蔵書印「姫水媿観」。

江湖詩社の四才、市河寛齋・柏木如亭・大窪詩仏・菊池五山の絶句を百首ずつ収録したもの。上巻に寛齋と如亭、下巻に詩仏と五山のもを収める。編者の秦里居士・細庵外史・詩禪道人は、それぞれ北原秦里（一七八五～一八二九）、宮沢雲山（一七八一～一八五二）、梁川星巖（二七八九～一八五八）。江湖詩社の四才に次ぐ若手詩人たち。版元の「文刻堂」と「玉山堂」は、江戸の西村源六と山城屋佐兵衛。

（中尾友香梨）

### 日本楽府（にほんがふ） 097-18 刊 頼山陽著・牧信侯註

大本、一冊。原表紙、原題簽「日本楽府」。内題・版心題・目録題「日本楽府」。見返しなし。巻頭に文政十二年（一八二九）十二月の篠崎小竹の「序」、同年九月の牧信侯の「註日本楽府叙」、同年冬の藤世張の「後叙」、田能村竹田の「読日本楽府評語十二則」を冠す。内題下、

山陽外史擬製／美濃 牧晩信侯註

巻末に文政十一年（一八二八）十二月二十八日付の山陽の自跋あり。刊記・奥付なし。蔵書印なし。

本邦の史実六十六題を選んで、楽府体に詠じたもの。初版は文政十三年（一八三〇）の刊行か。註釈を施した牧信侯は、牧百峯（一八〇一～一八六三）、名は輓、信侯は字。「後叙」を書いた藤世張は、後藤松陰（一七九七～一八六四）、名は機、世張は字。両者とも頼山陽の弟子。松陰の妻は篠崎小竹の娘。（中尾友香梨）

詩語碎金（しごごさいきん） 097-19 刊 泉要編・石作貞校

半紙本、二巻一冊。原表紙（一部破損）、原題簽「詩語碎金

新刻」。内題・版心題・目録題・尾題「詩語碎金」。見返し、

天保新刻

詩語碎金

書林合梓

上巻冒頭に「延陵文学 石川貞」による「附言」を冠す。春・夏・秋・冬・雑の五部立ての目録を有するが、雑部の目次の丁は抜け落ちている。上巻に春部・夏部、下巻に秋部・冬部・雑部を収める。内題下、

東都 泉要士徳 編纂

信陽 石作貞士幹 訂正

下巻末に安永五年（一七七六）八月の石作貞（士幹）の「詩語碎金跋」が備わる。奥付・刊記はなし。蔵書印「桜岡」「尚□」「半酣」「温故」。

詩語に平仄・読み仮名・意味を施した作詩入門書。題から推測されるように、『詩語碎錦』（永田観鷺編、明和四年序）を意識し

て作られたもの。初版は安永七年（一七七八）に刊行。該書冒頭の石川貞の「附言」及び巻末の石作貞の跋によれば、本書は日向延岡藩二代藩主・内藤政陽が発案し、藩儒石川貞にその編纂を命じたものの、石川貞は講授に暇がなかったので、同じく南宮大湫門の士幹（石作貞）と士徳（泉要）に編纂と校訂を依頼して成ったものである。石作貞は石作駒石（一七四〇～一七九六）、信州の人、士幹は字。泉要（士徳）は未詳。（中尾友香梨）

続詩語碎金（つづしごごさいきん） 097-20 刊

国枝惟熙編・熊田惟孝校

半紙本、二巻一冊。原表紙、原題簽「続詩語碎金 全」。内題・

版心題・目録題・尾題「詩語碎金続編」。見返しは『詩語碎金』（097-19）と同じ版木を使っている。文化十四年（一八一七）三月の序を冠するも、題・署名・印記はなし。『詩語碎金』と同じく春・夏・秋・冬・雑の五部を立て、上巻に春部・夏部、下巻に秋部・冬部・雑部を収める。跋文・奥付・刊記はなし。内題の下、

尾張 国枝惟熙成卿 編輯

熊田惟孝子友 校訂

蔵書印「桜岡」「尚□」「半酣」「温故」。

『詩語碎金』の続編として作られたもの。初版は文政三年（一八二〇）に刊行。編者の国枝惟熙は、国枝松宇（一七九六～一八八〇）、尾張の蠟燭商、惟熙は名、成卿は字、別号に老足等。

（中尾友香梨）

山陽詩鈔 (さんようししょう) 097-21 刊 頼山陽著

大本、六卷三冊(第一冊卷一〜二、第二冊卷三〜四、第四冊卷七〜八)。第一冊と第二冊は原表紙破損、遊び紙に打付け書き「山陽詩鈔」。第四冊のみ原表紙、原題簽「山陽詩鈔」。内題・版心題・尾題「山陽詩鈔」。目録なし。見返し、

天保癸巳新鐫

山陽詩鈔

書林五玉堂蔵

第一冊冒頭に天保三年(一八三二)十月の篠崎小竹の「序」と識語(刷)を冠す。卷一〜四・七のそれぞれの内題下、

頼襄子成著 後藤機校

卷八の内題下、

頼襄子成著 牧輓校

頭書欄外に諸家の評語を刻す。第四冊末尾に後藤松陰の「後叙」が備わる。奥付、

天保四年癸巳三月発兌

書肆 京都御幸町通御池下ル町

菱屋孫兵衛

藝州広島元安橋東詰

米屋兵介

大阪心齋橋通北久太良町

河内屋喜兵衛

同 安土町角

河内屋儀助

同 博労町南入

河内屋茂兵衛

同 備後町南入

河内屋徳兵衛

蔵書印「集義精舎」「九新館」。頼山陽の詩を収める。

(中尾友香梨)

山陽詩鈔 (さんようししょう) 097-22 刊 頼山陽著

大本、二卷一冊(卷七〜八)。原表紙、打付け書き「山陽詩集」。

097-21の第四冊と同版だが、後刷。跋文(後藤松陰の「後叙」と奥付も備わる。蔵書印「惕所」。

(中尾友香梨)

栗山文集 (りつざんぶんしゅう) 097-35 刊 柴野栗山著

大本、一冊(卷二の上冊のみ存)。原表紙、打付け書き「栗山文集二上」。内題・版心題・尾題「栗山文集」。版心下段に「桐陰」とある。版元「桐陰書屋」を指す。内題下、

男 允升 允常 全校

跋文・奥付等なし。蔵書印「荻府学校」。

柴野栗山(一七三六〜一八〇七)の散文を収める。校訂者の允升は柴野碧海(一七七三〜一八三五)、允常は柴野方閑(???)、ともに栗山の弟貞毅の子で、栗山の養子。

(中尾健一郎)

静寄軒集(せいきけんしゅう) 097-56 写 尾藤二洲著

半紙本、三冊。第一冊は原表紙、第二冊は共紙表紙、第三冊は後補表紙、すべて題簽・外題なし。内題は、第一冊「静寄軒集」、第二冊・第三冊「静寄軒集附録」。しかし実際の収録内容は次のとおり(巻次は内閣文庫本による)。

第一冊 『静寄軒集』巻五〜同巻十三

第二冊 『静寄軒集附録』巻二・三・四。但し巻四末の「静寄軒記」「静寄東軒詩」は第三冊末に収められている。

第三冊 『静寄軒集附録』巻五〜七  
蔵書印「荻府学校」。

尾藤二洲(一七四五〜一八一四)の散文を収める。内閣文庫本は十七巻八冊に附録七巻五冊を具えており、小城鍋島文庫本はこの系統の写本を抄録したものと見られる。(中尾健一郎)

〔参考〕佐野正巳「静寄軒集」解題(『詩集日本漢詩』第七巻、汲古書院、一九八七年)

精里集(せいらしゅう) 097-57 刊 古賀精里著

大本、二巻二冊(初集巻二、二集巻二)。初集は表紙なし。二集は原表紙、題簽剥落、打付け書き「精里」。初集の内題・版心題・尾題「精里初集抄」、二集の内題・版心題・目錄題・尾題「精里二集抄」。二集の見返し、

精里古賀先生著

精里二集抄

愛月堂蔵

二集の序題「精里先生遺文第二集序」、序末、

文化丁丑冬十月

従五位下伊勢守山村良由識時 年七十六

烏林石簡書

山村良由(号は蘇門、一七四二〜一八二三)は、天領木曾の代官を務め、後に尾張藩家老に任ぜられた人物。詩人としても知られる。刊記・奥付等なし。蔵書印「荻府学校」(大)。

古賀精里(一七五〇〜一八一七)の詩文集。蘇門の二集序によれば、精里の生前すでにその草稿が初集と二集とに分けられていたため、精里の三男侗庵(一七八八〜一八四七)が編纂時に、父の意を重んじてこの体裁にしたという。蘇門が序を著すに至ったのは、文化十四年(一八一七)に精里が死去した後、侗庵の依頼を受けたことによる。(中尾健一郎)

〔参考〕佐野正巳「精里集抄」解題(『詩集日本漢詩』第七巻、汲古書院、一九八七年)

精里集(せいらしゅう) 097-57 刊 古賀精里著

大本、二巻二冊(初集巻二、二集巻二)。初集は原表紙、原題簽破損。二集は原表紙、題簽剥落、打付け書き「精里二集抄」。初集の第一丁なし。前掲の『精里集』と同版。同じ帙に収められているが、蔵書印が異なる。蔵書印「荻府学校」(小)。

(中尾健一郎)

精里三集 (せいりしゅう) 097-58 刊 古賀精里著

大本、五卷五冊。原表紙、第一冊原題簽剥落、打付け書き「精里文集 一(一五)」。第二冊～第五冊は原題簽一部破損。内題・外題・版心題・目錄題・尾題「精里三集文稿」。見返し、

精里古賀先生著

精里三集文稿

愛月堂藏

序文二篇。一篇は題「精里三集序」、文末、

文政二年己卯五月望 神戸城主藤原忠升撰並書

もう一篇は、題「精里先生三集序」、文末、

文政改元戊寅夏六月 増島固敬識 男谷思孝書

跋文も二篇。一篇は文末に、

文政己卯五月 受業 吉田畿謹撰

とあり、もう一篇は文末に、

文政己卯夏五月 不肖燾謹撰 向陵賀瑛之書

とある。刊記・奥付等なし。蔵書印なし。

序文を撰した藤原忠升と増島固は、それぞれ伊勢神戸藩第五代藩主本多忠升(一七九一～一八五九)と昌平饗教授増島固(号は蘭園、一七六九～一八三九)。ともに古賀精里の門人。蘭園の序を書いた男谷思孝(号は燕斎、一七七七～一八四〇)は、幕臣、能書家。ちなみに蘭園の序によれば、『精里初集抄』『精里二集抄』は文政元年(一八一八)六月以前に既に上梓されていたようである。

一つめの跋文を著した吉田畿は、精里の高弟、千坂廉斎(名は畿、字は千里、一七八七～一八六四)。故あって吉田姓を名乗ったことが、『森銃三著作集』卷八(中央公論社、一九七四年)所収「小島蕉園」に指摘されている。廉斎は『精里初集抄』『精里二集抄』『精里三集文稿』の校訂者の一人であり、『精里初集抄』の樺島石梁(一七五四～一八二八)の序も書している。二つめの跋文を著したのは、精里の長子、古賀穀堂(一七七七～一八三六)であり、それを書した向陵賀瑛之は、幕臣、多賀谷向陵(一七六六～一八二七)。(中尾健一郎)

新序(しんじょ) 054-36 刊 漢・劉向著 明・程榮校

大本、八卷四冊(卷三・四欠)。表紙題簽「劉向新序」。目錄あり。内題「新序」、内題下「漢沛郡劉向著／明新安程榮校」。奥付、

東都 金華平玄仲訓点

享保二十歲丁卯(一七三五)二月吉旦

江府書舖 錦山堂

植村藤三郎梓行

蔵書印、「小城蔵書」「□山」。

『新序』は、劉向(前七七～前六)が先秦の古籍を整理・分類した際、故事・逸話を集めてまとめた書である。本文庫蔵本は、明の程榮が編纂した『漢魏叢書』所収本に基づき、平野金華(一六八八～一七三二。名は玄中、または玄仲)が訓点を施した書である。なお、『和刻本諸子大成』(汲古書院 一九七五年)(底本:

内閣文庫蔵本）は本文庫蔵本と同版本だが、刷の状態を見る限り、本文庫蔵本のほうが後印本であろう。（土屋育子）

〔参考〕広常人世『新序』（明德出版社 一九七三年）。

### 孔子家語 (いこうけい) oksh-30 刊

魏・王肅註 日本・岡白駒補註

大本、八卷四冊（全十巻の巻七・八欠）、刷題簽「孔子家語（補註）」、見返し匡郭上「万延庚申補刻」、見返し「龍洲先生校定／補註孔子家語／浪華書房宝文軒梓」。版心「補註孔子家語」、「風月堂藏」。王肅序、目錄（篇目）あり。目錄のあとに、岡白駒序、序末「元文丁巳春三月之望 西播 岡白駒識」とある。内題「孔子家語」、内題下「魏瑯琊王肅註／日本西播岡白駒補註」。後序末「寛保元辛酉歳十二月之吉／京師書坊 風月堂莊左衛門重梓」。奥付、

天保十四年癸卯九月鐫

発行書林／江戸日本橋通一丁目／須原屋茂兵衛

同所二丁目／山城屋佐兵衛

同芝神明前／岡田屋嘉七

同浅草茅町二丁目／須原屋伊八

大阪心齋橋通順慶町北入／河内屋勘助

とあり。山城喜憲氏は本書を、「万延元（一八六〇）年〔通修〕（大坂 宝文軒）」として、奥付について「本文印面に比し明らかに後刷であり、他書からの流用であろう」とする。蔵書印「小城藩」。

『孔子家語』は、孔子と孔門弟子の言行・逸話を広く収録した書である。『漢書』芸文志に『孔子家語』二十七巻が著録されるが、現行の『孔子家語』は、魏の王肅注本から出た十巻本である。岡白駒補注本は、注釈付きの和刻本として最も早く刊行された書（元文二（一七三七）年序寛保元（一七四一）年刊）であるが、本書は天保十四（一八四三）年の後印本である。本書の注釈者岡白駒（一六九二～一七六七）は、字千里、号龍洲といい、播州網干の人。延享四（一七四七）年ごろから佐賀藩の支藩蓮池藩に出仕し、直恒・直興・直寛の三代にわたって仕えた。（土屋育子）

〔参考〕檜垣里美「岡白駒年譜」（尾方仂解説『岡白駒沢田一斎施訓 小説三言』ゆまに書房、一九七六年）、山城喜憲「知見孔子家語諸本提要」（一）～（三）（『斯道文庫論集』二二・二二・二四 一九八三・一九八七・一九八九年）、宇野精一『新釈漢文大系53孔子家語』（明治書院、一九九六年）。

### 孔子家語 (いこうけい) oksh-31 刊

魏・王肅註 日本・岡白駒補註

大本、四巻二冊（第一冊巻三・四、第二冊巻一・二、巻五～十欠）、表紙題簽なし、打付け書き「孔子家語」、内題「孔子家語」、内題下「魏瑯琊王肅註／日本西播岡白駒補註」。巻一に序、目錄、岡白駒序がある。『孔子家語』oksh-30とほぼ同版。山城喜憲氏は取合本であると指摘する。蔵書印、第一冊冊頭「藤印直愈」、第二冊冊頭「荻府学校」。なお、佐賀大学附属図書館「小城鍋島



文庫目録』(一九七五年)では本書 oksh-31 を「標箋孔子家語」とするが、それは誤りで、oksh-33 が「標箋孔子家語」である。

(土屋育子)

孔子家語 (いこうけい) oksh-32 刊

魏・王肅注 日本・太宰春台増注

大本、八卷附録一卷四冊(全十巻の第三・四巻欠)、表紙題簽なし、打付け書き「孔子家語」、見返し「春台先生増註」「不許翻刻／千里必究」／孔子家語／江都 書肆嵩山房梓。序文「増註孔子家語序」、序文末「元文元年柔兆執徐仲冬己亥／信陽太宰純序」、「孔子家語序」、「王肅略伝」、目録あり。内題「孔子家語」、内題下「魏東海王肅注／日本信陽太宰純増注」。跋文は、附録は、底本とした汲古閣版原有の「汲古閣板孔子家語跋」(毛晋跋及び何孟春序〔末尾「大明正徳二年歲次丁卯仲春二月壬寅後学彬陽何孟春子元謹序」〕)、その後に一格低く太宰春台の自跋を付す。奥付、

太宰弥右衛門増註

寛保二年壬戌春正月吉

江都書肆嵩山房蔵板

須原屋小林新兵衛

蔵書印「荻府学校」。

何孟春(一四七四～一五三六)は、字子元、郴州の人。明の弘治六(一四九三)年の進士。元代や明初の『孔子家語』が抄録本

であったので、何孟春は復元を試み、正徳二(一五〇七)年に注を付して出版したという。

(土屋育子)

標箋孔子家語 (ひょうせんこうけい) oksh-33 刊

魏・王肅注 日本・太宰春台増注 千葉玄之釐訂

大本、四卷附録一卷二冊(第一冊巻五・六、第二冊巻九・十・附録)、表紙題簽なし、打付け書き「孔子家語」、内題「孔子家語」、内題下「魏東海王肅注／日本信陽太宰純徳夫増注／同江東千葉玄之子玄釐訂」、版心題「標箋孔子家語」、跋文「標箋孔子家語跋」、跋文末「寛政改元己酉秋／日光防火使隊長塩野光迪謹跋」。附録は、oksh-32 「孔子家語」と同じものが転載されている。奥付、

寛保二年壬戌春正月

太宰弥右衛門増註

天明七年丁未秋七月

千葉茂右衛門釐訂

寛政改元己酉冬南至日

江都 嵩山房小林新兵衛蔵板

蔵書印「荻亭蔵書」。

千葉玄之(一七二七～一七九二)は、字子元、通称茂右衛門、号芸閣、江戸の人。

(土屋育子)

中尾友香梨（佐賀大学 教授）

白石良夫（佐賀大学地域学歴史文化研究センター 特命教員）

大久保順子（福岡女子大学 教授）

土屋育子（東北大学 教授）

沼尻利通（福岡教育大学 准教授）

中尾健一郎（熊本大学 准教授）

村上義明（佐賀大学地域学歴史文化研究センター 講師）